

漱石作品論集成

〔第十二卷〕

明暗

明暗

鳥井正晴 編
藤井淑禎

江苏工业学院图书馆

藏書章
石作論集
[卷十二]

【発行】……………一九九一年一月一〇日

【編者】……………鳥井正晴・藤井淑禎

【発行者】……………坂倉良一

【印刷所】……………朝日精版印刷株式会社

〒102 東京都千代田区猿樂町一―三―一

(株) 桜楓社

電話〇三―三―九五―八七七一

振替東京 六一―八〇二〇

ISBN4-273-02421-7 C1093

1991 M.T. & H.F. ©

鳥井正晴 (とりい まさはる)

一九四七年芦屋市に生れる

早稲田大学卒業

関西学院大学大学院(博)修了

現在相愛女子短期大学

藤井淑禎 (ふじい ひでたけ)

一九五〇年豊橋市に生れる

慶応義塾大学卒業

立教大学大学院(博)修了

現在立教大学

『漱石作品論集成』刊行にあたって

現在の近代文学研究は学際的な成果を取り入れつつめざましい展開を見せています。とりわけ漱石研究においては作家論・作品論を問わず、じつにさまざまな方法と視点によってユニークな論考が提出されています。しかし、そうした貴重な問題提起が十分に活用されていない現状も否定できません。そこで漱石研究の体系化への一助として、決定版全集刊行以後飛躍的に進展した昭和十年代から現在までの重要な論文を精選、十二巻として作品別に編集することにしたしました。

この『漱石作品論集成』は、既成の叢書・講座などにとらわれず、漱石研究五十年の史的展開をできるかぎり同時代の文学（研究）状況とのかかわりのなかでとらえ、あわせて漱石研究における論争（史）の位置づけを試みました。

巻末の「解説」は、編集担当者（企画委員）との〈鼎談〉方式で、新鮮な発想による問題提起に努めました。

(株) 桜楓社

監修

玉井 敬之

企圖委員

淺田 隆

淺野 洋

太田 登

鳥井 正晴

藤井 淑禎

堀部 功夫

村田 好哉

『明暗』

『明暗』……………	小宮 豊隆……………	9
『明暗』……………	岡崎 義恵……………	26
『明暗』における漱石―虚無よりの創造―……………	猪野 謙二……………	44
漱石における「現実」―『明暗』について―……………	加藤 周一……………	56
『明暗』論……………	唐木 順三……………	65
『明暗』……………	大岡 信……………	90
『明暗』……………	江藤 淳……………	105

則天去私をめぐる——『明暗』と則天去私の関係……………	平野 謙……………	125
『明暗』……………	内田 道雄……………	134
明暗のかなた……………	越智 治雄……………	149
『明暗』解説……………	荒 正人……………	162
柳のある風景——『明暗』の方法……………	高木 文雄……………	204
『明暗』にかんする断想……………	清水 茂……………	222
漱石「私の個人主義」について……………	北山 正迪……………	235
——『明暗』の結末の方向……………		
「明暗」……………	平岡 敏夫……………	248
「明暗」の構造……………	三好 行雄……………	262

鼎談

『明暗』方法……………秋山 公男……………281

『明暗』キー・ワード考―〈突然〉をめぐって―……………清水 孝純……………292

『明暗』の結末について……………大岡 昇平……………316

『明暗』論―津田と清子―……………加藤 二郎……………335

『明暗』論―修身の〈家〉／記号の〈家〉―……………石原 千秋……………357

あかり革命下の『明暗』……………藤井 淑禎……………370

鳥井正晴・藤井淑禎・太田 登（司会）……………383

明
暗

『明暗』

小宮豊隆

『明暗』は、大正五年五月二十六日から大正五年十二月十四日まで、百八十八回に亘つて東西の朝日新聞に連載され、未完成のままに終つた、漱石最後の小説である。漱石は十一月二十二日に発病して、十二月九日に竟に起たなくなつた。然し漱石は発病前に少し書き溜めてゐたので、小説は、漱石の死後なほ五日間、新聞紙上に連載された。この事は当時の多くの読者に、何か悽愴な感じを与へた。

然しそれよりもつと悽愴な感じに襲はれたのは、漱石の死後、漱石が日日それに凭つて『明暗』を書いてゐた紫檀の卓の上に、いつもの通り真ん中にキチンと原稿紙が積み重ねてあつて、その一番上の原稿紙の右の肩に、小さく189と、漱石の手蹟で書いてあるのを発見した時であつた。是は、恐らく十一月二十一日漱石が『明暗』の第百八十八回を書いてしまつたあと、明日書くのは第百八十九回であるといふ事を忘れない為に、此所に書きつけて置いたものに違ひないのである。然しその翌日の十一月二十二日には、漱石は、胃部の不安と苦痛との為に、その189と心覚えに書きつけた原稿紙の上に突つ伏したまま、一字一行も書く事が出来ず、午後には到頭床をとつてもらつて寝込んでしまはなければならなかつた。さうして十二月九日午後六時四十分には、到頭不帰の客とならなければならなかつた。

漱石が腰を据ゑて、もつとずつと長く『明暗』を書き続ける氣でゐた事は、漱石が十一月十六日成瀬正一に宛てて、『明暗』は長くなる許で困ります。まだ書いてゐます。来年迄つゞくでせう。」と書いてゐるのを見ても、十分想像する事が出来る。然しそれよりもずつと前、既に八月二十四日に漱石は、芥川龍之介と久米正雄とに宛てて、「牛になる事はどうしても必要です。吾々はとかく馬になりたがるが、牛には中々なり切れないです。僕のやうな老猾なもので、只今牛と馬とがつて孕める事ある相の子位な程度のものです。／＼あせつては不可せん。頭を悪くしては不可せん。根氣づくでお出でなさい。世の中は根氣の前に頭を下げる事を知つてゐますが、火花の前には一瞬の記憶しか与へて呉れません。うん／＼死ぬ迄押すのです。それ丈です。決して相手を拵らへてそれを押しちや不可せん。相手はいくらでも後から後からと出て来ます。さうして吾々を悩ませます。牛は超然として押して行くのです。何を押すかと聞くなら申します。人間を押すのです。文士を押すのではありません。」と書いてゐる。無論是は、是から文壇に打つて出ようとしてゐる若い二人に対する、先輩としての漱石の忠告であり、又その限りに於いては、是ほど適切な忠告もないのではあるが、然しそれとともに

是は、漱石の、自分自身に対する——特に『明暗』を百回近くも書き込んで来てゐながら、まだいつ結末になるともはつきりした見透しがつけられないやうな状態に置かれた、自分自身に対する、副意識的の、忠告ででもあり、決意の宣言でもあつたやうに、私には思はれる。自分は目下の所、「牛と馬とつかつて孕める事ある相の子」程度のものに過ぎないと言つてゐる漱石には、「とかく馬になりたがる」自分を押へて、牛に「なり切」りたい意志が、此所で十分動いてゐるのである。然しそれほど覚悟をきはめ、それほど腰を据ゑて、この仕事に立ち向かつたのにも拘はらず、天は竟に漱石に『明暗』を完成する事を許さなかつた。漱石から言へば、是ほど遺憾な事はなかつたに違ひない。当時漱石が「死ぬと困るから」と言つた言葉を捉まへて、漱石の往生際の悪い事を冷評した作家もあつたやうであるが、是だけ心を打ち込んだ仕事を、じさしたままで死ぬ事は、漱石にとつて死んでも死にきれない心残りの事であつたのは、言ふまでもない事である。

漱石は『明暗』を書いてゐながら、その世界の不愉快な気分から遁がれ出る為に、毎日午後から夜へかけて、或は漢詩を作り、或は書や画をかくて、頭の洗濯をしてゐたと、言はれる。是は既に大正五年八月二十一日久米正雄と芥川龍之介とに与へた手紙の中で、漱石自身「僕は不相変『明暗』を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快楽、器械的、此三つをかねてゐます。存外涼しいのが何より仕合せです。夫でも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つ位です。さうして七言律です。中々出来ません。

厭になればすぐ已めるのだからいくつ出来るか分りません。」と言つてゐるのだから、抗論の余地がない。その上『明暗』の世界は、誰が読んで見ても、決して愉快な世界ではないのである。かういふ世界に長い間首を突つ込んで、その世界の空気を二六時中吐き吞して暮らさなければならぬとすれば、それは仮令その作者でないとしても、今にも窒息しさうな、やりきれない気持になるに違ひない事は、言を俟たない。漱石が「大いに俗了された心持」になり、それを洗ひ浄める為に、漢詩を作る事を日課にし始めたといふ事は、寧ろ当然の事であると言つて可いのである。

ただ区別を要する事は、その事実が直ちに、漱石が『明暗』そのものを創造する事に不愉快を感じたといふ事を、意味するものではないといふ事である。漱石が『明暗』で取り扱つた世界は、不愉快な世界であつたには違ひない。又その世界の中に長い間頭を浸けてゐる事は、漱石にとつて、自分自身の世界を「俗了」する事であつたには違ひない。然しもし此所に漱石の中に、漱石を導くより高きイデーがあつて、そのより高きイデーに仕へる為には、是が非でもこの不愉快な世界の中に潜り込まなければならなかつたのだとすれば、漱石にその事が愉快・不愉快であるに論なく、漱石が敢然その中に跳り込まなければならなかつた事は、言ふまでもない事である。即ち漱石は、自分の中より高きイデーに仕へ得る事の欲の為に、小さな私の快・不快なぞ、犠牲にして省みまいとするのである。事実漱石は、自分の『明暗』を書く「心持は苦痛、快楽、器械的、此三つをかねてゐる」のだと言つてゐる。

のみならず漱石は同じ手紙の中で、「尋仙未向碧山行。住在人間足道情。明暗双双三万字。撫摩石印自由成」といふ自作の漢詩を、

相手に披露さへもしてゐるのである。勿論漱石はこの際、「明暗」々といふのは禅家で用ひる熟字であります。三万字は好加減です。

原稿紙で勘定すると新聞一回分が一千八百字あります。だから百回に見積ると十八万字になります。然し明暗双々十八万字では字が多かつて平仄が差支へるので致し方がありません故三万字で御免を蒙りました。結句に自由成とあるは少々手前味噌めきますが、是も自然の成行上已を得ないと思つて下さい」と、多少弁解を試みてはゐる。然し此所に漱石の、自分のして来た仕事を、ある満足を持つてふり返へて見てゐる心持が出てゐる事は、争はれない。少くともかういふ詩は、厭厭『明暗』を書いてゐる心持からは、到底生れて来やうがないのである。

その上、文献的に言つても、この八月二十一日の手紙以外、漱石が『明暗』を書いてゐて、多少でも不愉快な思ひを経験しなければならなかつた趣を洩らしてゐるものは、外に何所にも見当らないのである。反対に、例へば八月五日和辻哲郎宛の手紙の中には、「此夏は大変凄きいゝやうで毎日小説を書くのも苦痛がない位です僕は庭の芭蕉の傍に畳み椅子を置いて其上に寐てゐます好い心持です身体具合が小説を書くのも骨が折れませんが却つて愉快を感じる事があります長い夏の日を芸術的な努力で暮らすのはそれ自身に於て甚だ好い心持なのです其精神は身体の快楽に変化します僕の考では凡ての快楽は最後に生理的なものにリヂユースされるのです。賛成出来ませぬか。」と書いてありさへもする。八月十八日久保頼江宛の手紙の中には、「小説をはめて下すつて有難う。何だか馬鹿に長くなりさうで弱ります。然し此夏は大変凄きやういので書くのに骨が折れないで仕合せです。」とあり、八月二十一日久米正雄・芥川龍

之介宛の手紙の終にも、「私はこんな長い手紙をたゞ書くのです。

永い日が何時迄もつゞいて何うしても日が暮れないといふ証拠に書くのです。さういふ心持の中に入つてゐる自分を君等に紹介する為に書くのです。夫からさういふ心持でゐる事を自分で味つて見るために書くのです。日は長いのです。四方は蟬の声で埋つてゐます。」とある。漱石は、自分の命根を噛むの潰瘍が、黙黙として爆発の準備を続けてゐるのにも気がつかずに、自分の「生理的なものにリヂユースされ」た快楽を味はひ楽しみつゝ、寧ろいそいそと『明暗』を書いて行つてゐるやうなのである。——事実また、自分が自分の腰を据え、魂を打ち込んで書くものが、著書として眼鼻立を整へて行くといふ事が、一人の芸術家にとつて、嬉しくない筈がない。

一つの芸術を創造する者にとつて、その創造に必然に随伴する艱難を克服するに際して、多くの苦痛を経験しなければならないのは、当然である。同時に、一つのより高きイデーに仕へようとする者が、そのイデーに仕へる事から生ずる、あらゆる艱難と苦痛とを堪へ通さなければならぬのも、亦当然である。然もそれらの艱難と苦痛とは、創造の歎びやより高きイデーに仕へる歎びに比べれば、殆んど物の数にも足りない、小さなものであるに過ぎなかつた。また、さう感じ得るのでなければ、本式に、より高きイデーに仕へたり、一つの芸術を創造したりする氣に、なれるものではないのである。漱石は、それらの艱難と苦痛とを堪へ通す為に、一方では、或は漢詩を作り、或は書をかき画をかけた。漢詩や書画は、漱石にとつて、言はば潜水服のやうなものである。是で身を固める事によつて、漱石は安んじて、人間の心の海の、怖ろしい深みへ潜つて行き、其所

で無限に続く、自分の探險事業に従事する事が出来るのである。それだから漱石は、牛のやうに「超然として押して行く」覚悟で、平然として『明暗』は「来年迄つゞくでせう」といふ。然も漱石が敢て「来年迄つゞくでせう」と言ひ得たといふ事は、漱石がこの仕事を續けて行く事に、十分の歡びを持つてゐたといふ事を証明する。

漱石が、それに仕へる事を無上の歡びとした、より高きイデーとは何であるか。——それは言ふまでもなく、漱石の所謂「則天去私」の世界である。天に則つて私を去る世界である。換言すれば、漱石が、人間の心の奥深く巢喰つてゐるエゴイズムを摘出して、人人に反省の機会を与へ、それによつて自然な、自由な、朗らかな、道理のみが支配する世界へ、人人を連れ込もうとする事である。

恐らく大正五年の三月下旬に書かれた日記の中に、漱石が「己は臆病かも知れない。鷹揚でないかも知れない。然し正しいのだ。正しいものとして正しくないものを打ち倒さうとするのだ。故なく他を損ふものを嫉むから、そんなものはどうして「も」打ち懲らさなければならぬといふ氣がむら／＼と湧いて出て、この己を不安にするのである。己の落付のないのは巡查や探偵が眼を皿のやうにして良民を害する悪者を捕へやうと一生懸命に氣を遣つてゐるやうなものだ。」と書いてゐる事は、既に『彼岸過迄』の解説の中で引用したが、漱石は昔からこの「正しい」、道理の世界に立つて生きて来た。然し漱石を取り巻く周囲の世界は、すべて「正しくない」、道理に戻つた世界に立つて平氣であつた。それが漱石を不安にし、漱石に「そんなものはどうして「も」打ち懲らさなければならぬといふ氣」を「むら／＼と湧」き立たせ、漱石をして、漱石の芸術

を採り上げしめるのである。——かうして出来上がったものが、漱石の初期の多くの作品であつた。

然るに修善寺の大患以来、漱石の心は、特に次第に内へ向き始めた。「正しくない」、道理に戻つた生活をする他人を憎む点では、漱石の態度は以前と少しも変る事がなかつた。それは大正五年の日記に就いて見ても明白である。然し修善寺大患後の漱石は、「正しい」、道理の世界に立つて生活してゐると信じ切つてゐた自分の中にも、なほ且つ「正しくない」、道理に戻つた世界が、掘り出せばいくらでもある事を発見して、他人を憎むとともに、自分をも憎まずにはゐられない、特別な立場に置かれるのである。是は漱石にとつて、正に一大事であつた。他人の事どころではない。みんな自分の身の上の事である。かうして漱石は、自分自身の心の修業を問題にし出した。勿論前期の漱石に、この問題が、少しも採り上げられなかつたと、言ふのではない。然し死の問題とともにこの問題が、特に修善寺の大患以来、殊にその後年年の潰瘍以来、痛切に漱石の問題となり出すのである。漱石には、他人の私とともに、自分の私に氣になり始めた。他人の私を点検するとともに、自分の私を点検しなければゐられなくなつた。氣がついて見ると、自分の中には、醜いもの、奇怪なものが、陰の襷の中に隠れてゐて、うちやうちやしてゐる。漱石はそれを曳き摺り出しては、一一克明に、我々の眼の前に列べて見せる。——それは前期の作品に於けるよりは、更に精到な、更に深刻な、更に説伏力を伴つた、「正しくない」事、道理に戻つた事の、剔抉であつた。同時に漱石は、他人の私を捕捉したもの、自分の私を捕捉したもので裏打ちし、それを言はば告白の形で世間の前に提供するのである。その剔抉に圧力があるのも、当然であつた。

それによつて我我は、我我の中にも亦さういふ醜いものが、いくらでも潜んでゐる事を、悲しく認識せざるを得なくなると同時に、何等かの方法で、一日も早くさういふものから脱却する事を、希望せざるを得なくなるのである。それは、漱石によつて剔抉されたものが、誰の私、彼の私といふのではなくて、一般人間の私として、我我に肉薄して来るやうになつてゐるからである。

かうして漱石は、修善寺大患以来、常に我我の肩間に、醜いものを突きつけ通した。然し漱石は、単に我我を不愉快にする為に、さういふ事をしたのではなかつた。我我を不愉快にする事によつて、我我に、一日も早くその不愉快なものを脱却する事を希望せしめようとするのが、漱石の大目的である。即ち漱石はそれによつて、自分が自分のモットオとして選んだ言葉のやうに、人人をして、天に則つて私を去らせようとするのである。恐らくは大正五年の五月の末、即ち『明暗』が新聞に連載され始める前後位に書かれた日記に、漱石は「倫理的にして始めて芸術的なり。真に芸術的なものは必ず倫理的なり」といふ、自分の信条を書き誌してゐる。より高きイデーに仕へる意志なくして、人は倫理的である事は出来ない。

——この言葉は、漱石の全芸術の本質を理解する上に、重要な鍵であるとともに、特に『明暗』を理解する上に最も重要な鍵であると私は思ふ。

その構成の見事に建築的な点から言つても、その描写の密度の恐るべく緻密な点から言つても、その登場人物の驚くべく多種多様な点から言つても、然もその多くの副人物が主人公との關係に於いて、極めて抜き差ししない重要な役目を勤めてゐる点から言つても、

『明暗』は、漱石の作品のみならず、明治・大正・昭和を通じて、恐らく類例のない、ユニークな作品である。然し更に驚嘆すべき事は、その緻密な描写の密度をもつて描き出してゐる所のものが、すべて人間のエゴイズムス——人間の私であるといふ事である。是ほど精細に、是ほど敏活に、またはほど深刻に、人間の私を掘り起して見せたものは、西洋に於いても、殆んどその比を見ない。然もその私もしくは我の描写は、人を異常な事件の中に置いて見せるといふやうな方法ではなく、単に主人公が病気で入院し、その病気が癒つて転地するといふ、極めて家常茶飯の事件に於いて行はれるのである。

勿論漱石から言へば、戯曲的な大事件の中に置かれて、人間が發揮する私もしくは我を描き出すといふ事は、寧ろ陳腐であり、それよりも人は、日常の生活に於いて、行住坐臥に私もしくは我を發揮して、少しもそれを反省しないであるといふ点に、それを指摘する興味と必要とが痛感されたものに相違ない。然しこの仕事は、それだけに、普通以上の眼力と普通以上の手腕とを必要とする仕事であつた事は、説明するを要しない。殊にかういふ家常茶飯事を、新聞の続き物として書き、然もそれを百回以上に亘つて書き続けつつ、なほ一般読者の興味をその小説の上に繋ぎ留めて置く為には、描写が絶えず活活してゐなければならないのは無論の事、歩一步人を心の深所に連れ込む事によつて、絶えず展望を新たにし、もしくは問題が絶えず進展して、一步も停滞したり重複したりする事を許さないからである。その為には漱石は、一方では津田とお延との心の底に分け入るとともに、一方ではそれから来る世界の狭さと世界の単

調とを避ける為に、津田とお延とに、いろんな人といろいろに交渉させなければならなかった。この点では漱石は、随分苦心したやうである。漱石は、例へば小林のやうな、是までの漱石の作品の中では、あまり見かけた事もないやうな人物を点綴して来て見たり、或はお秀とお延とを津田の入院してゐる病院で落ち合はさせ、其所で二人にひどく戯曲的な場面を演じさせて見たり、或はお延をしてお秀を訪問せしめ、夫婦の愛に就いて論じさせて見たり、或はお延一人を芝居にやつて、其所で継子の見合の立合をさせて見たり、又それに連れて不意に吉川夫人に会はせて見たり、その他『明暗』の世界に幅と変化とを与へる為に、あらゆる工夫を凝してゐるのである。さうしてそれは、ある意味から言へば、『明暗』の世界に、全然拵へもののやうな感じをさへ与へる、際どい所まで行つてゐるのである。

然し重要な事は、漱石がいくら工夫して局面の轉換を試みてゐても、漱石は決して自分の大目的を疎かにしなかつたといふ事である。如何なる場面がいかに出て来ようとも、漱石は決して、自分の身を落して、読者に媚びようとはしてゐない。反対に漱石は、その場面その場で、あらゆる人にその人らしく振舞はしめつつ、その人にこびりついてゐる私もしくは我が、その人流に発現する瞬間を、実に注意深く見成つて、それを刻刻に我我に報告する。従つてその人物もしくはその場面は、始めの間は何か此方に馴染まないものを感じさせる場合もあり得るに拘はらず、『明暗』全体の構成の中に置いて考へれば、それは、少しも不都合なものでもなんでもなく、寧ろ『明暗』の世界の中では、必然のものであり、それあるが為に『明暗』の世界の中に生きて動いてゐるすべての人間の私は、一層鮮や

かに我我の眼の中に跳り込んで来るやうな仕組になつてゐる事に、我我は初めて気がつくのである。——普通の意味での拵へものは、此所では拵へものにならない。拵へものと見たのは、実はいろんな人間の私を、更に廓大して見せる為の、一つの科学的な実験装置のやうなものだつたのである。

お秀が津田を病院に訪ねて、津田に必要な金を用達しようとする津田は、金は欲しいがお秀に頭を下げる事を欲しない。頭を下げるいでぬながら、その金をお秀に置いて行かせようとする。然しお秀はこの機会に兄が我を折つて、素直な心持で自分の好意を受け入れてくれる事を、希望してやまない。従つて御互は御互の我に災ひされて、出さうとする者は出せなくなり、欲しいと思ふ者ももらへなくなつてしまふ。其所へお延が這入り込んで来る。お秀はお延に対して、小姑の依怙を持つてゐる。お延は津田の批評を受け襲いで、お秀を謂はれなく輕蔑してゐる。その上お延は、丁度その時、岡本からもらつて来た計りの、必要以上の額面の小切手を懐ろにしてゐる。金の為に津田がお秀から苦しめられてゐると知つて、そのお延が黙つてゐる筈がない。何を猪口才なといひでもするやうに、お延はお秀の見てゐる前で、津田にその小切手を渡し、自分達の事は自分達で処理するから、余計なお節介はしてもらはなくても可いといふやうな身構へで、お秀を冷笑する。お秀はお秀で、自分の好意が無になつたのみならず、反つてその好意が冷笑をもつて蹂躪されてしまふのに、黙つてゐる事が出来ず、兄弟夫婦を前に置いて、自分が不斷から兄弟夫婦に就いて考へてゐる事を、思ひ切つてぶちまけてしまふ。——所謂自然主義者から言へば、この場面は、普通には先づ